

## 中小企業の新たな挑戦と経営を支える人づくり

### ～大学及び診断士の役割とは～

—2022年度 地域中小企業の経営を知る  
シンポジウムを開催—

昭和23年11月4日に「中小企業診断制度」が発足したことに因んで、11月4日が「中小企業診断士の日」と制定されたことを記念して、福井県中小企業診断士協会では、「地方創生シンポジウム」を開催していますが、今年は福井県立大学と連携し「中小企業の新たな挑戦と経営を支える人づくり」をテーマにした基調報告及びクロストークを行い、県立大学生、ウェブ参加を含め企業経営者、支援機関、行政等から113名が参加した。



まずは各事例などに先立ち、峠岡伸行副会長より「県内中小企業の現状と課題」について基調報告を行い、大学生向けに各統計データに基づいた中小企業の現状への理解と課題解決の方向性についてレクチャーを行った。



続いて事例の1社目は、「老舗料亭から新業態「料亭バル」への事業再構築」と題し、老舗料亭「うおとめ」（本社・越前市）が、既存の老舗業態からの事業転換として、懐石料理を気軽に楽しめる新業態「料亭バル」6月にオープンさせた経緯や背景、経営戦略について概要を紹介した。コロナ禍で店の経営が危機に陥る中で、



西本久美子女将は「宴会需要の戻りは弱く、今後は個人客の獲得が必要と感じた」と業態転換を決意し、完全予約制の業態から個人客がいつでも来店可能で一品料理やワインを楽しむ「バル」業態への再構築に取り組んだ経緯を紹介いただいた。さらに、再構築への取り組みにあたり「コロナ禍でお客様のニーズが変化する中で、新たな顧客層を取り込む戦略」を加藤永俊診断士に事業計画に落とし込んでもらうことで実現が可能になったと感想を述べた。



2社目の事例は、「創業と事業承継～成長するためのM&A～」と題し、20年間無店舗の花屋で営んできた実績を元に、今回のM&Aで後継者不在の生花店を取得し、新たな事業展開を行った(株)Dim（本社：越前市）のケースで、M&Aにより後継者不在だった同市内の生花店を事業承継した経緯や、福井県事業承継・引継ぎ支援センターからの支援内容について紹介があった。





五十嵐浩社長は「街に花屋がなくなるのはすごく寂しきことだと思った」とM&Aの経緯を語るとともに、支援を受けた坂下泰久診断士について「M&Aha 専門家の助言がなければ1人ではできない。なぜこの企業や業種を選ぶのか、自分の中で明確にする必要がある」と振り返った。



このほか第2部では、大学と中小企業診断士の連携の可能性をテーマに、今後のコラボレーションの可能性を含めたクロストークを行った。

参加した学生からは、中小企業経営について「中小企業にとっての成功が規模の拡大ではないというような自分が考えてもみなかった考え方を知ることができた」「経営環境の変化に合わせて将来を予測し需要を見抜き、スピード感をもって経営することが重要」「マーケットの急速な変化に対応できる柔軟さと挑戦に意欲的である社内精神が大事」などの意見があったほか、中小企業診断士については、「役割について話を初めて聞くことができた」「診断士は、中小企業の問題を解決し発展させることで、日本の経済を支えるような役割」「企業だけでは形にできないような案を実際に形にしていくために重要な役割を持っているのだ



と感じた」などの意見が聞かれ、学生対しても中小企業の新たな挑戦と経営を支える人づくりを考えるきっかけとなったのではないだろうか。